

長崎基督教への一概観

高松孝順

(一)

基督教が我が國に傳來せるは、後奈良天皇の天文十八年にして、スペイン人のフランシス・サビエルに依つて傳へられたのである。その入朝するや保護の本に布教傳道に専心し、其の勢益々隆盛に向ひ、信徒も相當の數に上つたのである。其の當時我國に於ては群雄蜂起し相爭ひ、世の秩序は亂れ民衆は極度に怯えて迷ひ、國內は大いに亂世となつた頃である。商工農の階級にありては、學問文明に明なる者は希にして其の大部分は昏昧の徒であつた。斯る時代に、歐洲の文明を多量に含味せる基督教の宣傳に昏昧の徒は唯驚嘆し、且つ其の信仰を益々深からしめたのである。斯る時にあつて傳道の目的は國土の侵略にある事を看破せられ、明正天皇の寛永七年、三代將軍家光は、基督教及び洋書の輸入を禁止し、此處に永く鎖國の大令が發せられたのである。此處に於て基督教は大鎮壓を受け、且又鎖國に伴ふ國學の勃興に依つて一層の彈壓を受けたのであるが、一旦深く刻み込まれた信仰は之を翻す術なく、それに對して幕府の嚴令の斷に嚴しく、遂に寛永十四年島原の亂となり籠城數旬月にして主領天草四郎は屈伏したのである。されど幕府の嚴令の斷行の本にあつて、表面的には全く一掃せられたのであるが、裏面に到つては彈壓に對する反動として、その信仰は益々潜抗的となり、佛像の背後や壁中に十字架を安置して潜に信じ、又マリヤ觀音と稱する一見佛像なるも、そは聖母マリ

やを現せるものであつた。然るに明治二十二年二月十一日、憲法發布せられるや、基督教徒は信教の自由を得て、潜在的信仰は一時に表面化し其の勢頓に隆盛したつた。斯くして信教は長崎を中心として各地方に増加し、現今猶東洋一を誇る大教會堂を建立し、遂に現今の教勢を有するに至つたのである。私は今淺學非才をも顧みず極めて小範圍なる長崎基督教に附いて知れる所を述べたいと思ふ。

(二)

先づ基督教の傳道に附いて一言せん。雲峰高く聳ゆる尖塔より朝な夕なに鳴り響く鐘こそ、基督教の百千の宣教師にも勝る大傳道者であらう。市民は鐘に對して非常な憧憬と慰安を持つた。朝靄を衝いて流れ來る餘音に、新鮮なる頭腦と一日の希望を勵まされ、一日の仕事は運ばれる。又一日の精根盡きて重き足を我が家に急ぐ時、港内の薄靄に流れ來る鐘音に一日の勞苦は忘れ、やがて明日への希望が湧立つ。斯る慰安の鐘に對しては市民の半數は唯慰安の鐘にして、宗教的概念を有しなかつたかも知れない。然し未信者に對しては、彼等の心を慰め且歡喜せしめる良き友であり、信者に取つては、一日の願ひ、感謝の祈の合圖であり、聖なる禮拜への導きである。信者達は恐らく皆祈つたであらう。ミレーの晩鐘の農夫夫妻の如くに。斯くして鐘は一時に民衆を導いた。此の無言の傳道者に次いで宣教師、牧師の傳道が目覺しき活躍を爲すのである。

彼等は熱烈なる信仰と、崇高なる人格と、殉教的精神と、優秀なる技術とに依つて、民衆に對して獻身的に努力をなし、民心を巧に把握して信念を説き聽かせるのである。斯くあるが故に聽衆をして眞に歡喜信受せしめ、強固なる信念を獲得させるのである。是即ち基督教傳道の隆盛をなす一大要件である。

然し乍ら、此處に注意すべきは傳道に伴ふ經濟力である。何れの宗派に於ても、傳道に多大の費用を計上し、然して

其の經濟力の豊富なる宗派が傳道力を勝ち得る事は當然の事柄ではあるが、一に基督教は、傳道會社の援助に依つて經濟力は確保せられて居るにせよ、それに増して彼等の努力と相俟つて、その成績の他宗を凌駕するは、基督教の實力ある事を示すものであり、其の成績こそ我等佛徒の手本であると言つても過言ではあるまい。

次に野外傳道に附いて一言せんに、四人或は五人が一團となりて、酣熱の日も嚴寒の夜も街角に立ちて、先づ樂器を以て民衆を集中せしめ、除るに神に祈つて後自己の信念を述べるのである。彼等は、先づ自己の體驗を初頭に述べ然る後に入信の實例を引き民衆を先づ信ぜしめ然る後に神の教を説くのである。

彼等の傳道の主眼は神の救済と博愛を説いた。然しながらその説く所は、結局人類の救済であり、何れの宗教も人生を理想化するを目的として創唱せられたる所よりして、佛教、殊に淨土教的立場にある様に考へられる。即ち（一）娑婆と天國とを分離して考へる來世宗教であり。（二）現世と死との一時的有限から脱出して神の永遠の存在にあづかる事。（三）永遠の生命は自力で獲得する事なくして、神の力に依つて得る他力宗教である事等である。然しその教義に就いては、所謂ドグマは雲泥の相異なる事は論を待たない。

以上述べ來りしは傳道に關す一私見であるが、然らば斯の如き牧師宣教師は如何にして養成されるかに就いて少しく論じよう。

如何なる諸宗教と言へども、悟に達する道程には幾多の荊路あり教祖は精神的に物質的に惱の繫縛を捨て去つて後、人格的存在となつた。斯の如くして祖師達は努力したのである。然るに現今に於ては時代の進展目覺ましく、文化萬能の世界となり、それに伴つて佛教の如きも、その修業方法も極めて簡單となり、眞の人格でさへ學問に依つて得られると考へられるに至つた。故に我等の宗乘研究に對する動作行動も稍もすれば怠り、或は不眞面目であつた。然るに今述べんとする基督教神學校の行動、様式は、猶現在に於ても嚴肅に且禁欲的に實行されて居る事だ。

坡山原頭に立つ白亞の殿堂こそ、彼等を養成する神學校（マリヤ學校）である。若き學徒の、その生活は世俗を離脱した聖なる生活だ。一度入學してより卒業期まで、外出する事を許されなかつたからである。毎月三四回の外出を除いては、全く殿堂生活であつた。その外出日こそ、教會堂の禮拜に行き、或は傳道を行ふ唯一の喜びの日である。校内にあつては終日神學を學び、殊に傳道に至つては一層訓練せられるのである。斯くして、才に、辯に益々勝れ、自信が信心となり、如何なる場合にも處置をなし得る用意を體得し、斯くして傳道の實績は擧げられるのである。

次に信者の實踐に附いて見るに、その最初のもものは禮拜であらう。我等が稱名相續をなす様に。信者は必ず毎日曜毎に教會堂に祈を捧げるのである。老若男女を問はず續々集合し、やがて祈りは捧けられるのであつて、神學校の生徒達に依つて三部合唱の讚美歌に初まつて讚美歌に終る。斯くの如く他教徒に比して祭禮の日を嚴格に、且嚴肅に守る事に於ても勝るであらう。日曜毎に自己の餘裕に應じて、或は一日を、或は半日、一時間を割いて必ず教會に行ぐのである。又中食も極めて粗食をなし、神の爲に精進するのである。最も驚嘆せしは、老婆が教會の板張りに約二時程跪いて祈を捧げて居た姿であつた。此こそ佛教の所謂禪三昧境であらう。

入信の儀式に就いては、基督教の重要な儀式であらう。之は淨土教の授戒に相當するものである。之に就いては私はあまり知らない。葬儀は必ず教會堂で之を行ふのであつて、自宅より教會までの道すがら、牧師と家族達は大聲にて、聖書を朗讀しつゝ行列する事になつて居る。家には祭壇なく、教會堂そのものが所謂祭壇なるが故に、亡者の日は必ず教會へ行くのである。

然して教會と信者とは、單なる信仰上の領域に止まる事なくして、人生の最大祝典とされる婚姻に於ても發見する事が出来る。祝典にあつて、牧師の介入は當然とされるに至つたのである。此の様に基督教は信者の間に、此の様にまで深く潛入し、信者に取つては教會は最上の相談相手である。斯くありてこそ宗派の隆盛も見られるであらう。

以上は基督教の現在の状態であるが、基督教を論ずるにあつて述べねばならぬ事は佛教との關係である。今それに就いて少しく述べよう。基督教傳道に對立して佛教側も盛に野外傳道に従事し彼に劣らぬ奮闘を續けて居る。基督教は外教は異教なりとして極度に之を斥ける。表面的には甚だしくは表現されずとも、兩教徒の意識の内に、潜在的に對敵視が存して居る事は明かで、兩教徒の接觸の時に於て、若しく表れ來るものである。今其の對立關係を實例を以て述べて見よう。

其の代表的なものは佛教徒の盆の行事で、基督教徒のクリスマスの行事であらう。前にも一寸述べた如く、基督教は永年の彈壓に依つて、必ず一ヶ寺を所有す可く定められ、年一回の檀家改メ（棚經）等に依つて、佛教に一時は支配された頃から、佛教の精靈送りの行事は最も盛で、基督教への示威となつて表れた。之に反してクリスマスも佛教徒への挑戰として盛に行はれ現在に至るも、共に盛大に舉行されて居る。

近年市街に編入せられし〇〇村がある、其の居住者の半々は兩教徒で占めて居る。斯の如き場合は、何事につけても兩派の分裂を來し、神聖である可き行政でさへも、稍もすれば議論は分裂し、詰る所は此の二派の勢力如何に依つて決定される事もある。現今基督教の優勢に伴つて次第に佛教徒は不利の立場にあると言ふ事である。其の他、異教徒への婚姻を許さざるが如きもその一例であらう。

(三)

以上の如く傳道を中心とする基督教の現状を觀たのであるが、明治時代から現在までの發展の道を振返つて見る時、其處には宣教師の並々な努力が發見され、幾多の變遷を経て遂に今日に至り、強固なる地盤を固め、國情に則つてその方針を定めつゝ進む姿こそ、尊きものである。我々佛教徒は基督教の傳道については、之を十分に含味し研究する必要がある、唯徒に異教として排斥す可きものに非ず。我々學徒は、益々傳道の發展を畫策しようではないか。